不完了体動詞から形成される能動形動詞の時制について

加藤　敏

1．はじめに

ロシア語の形動詞(причастие) の時制は、意見の一致が見られない問題の一つである。例えば、 Русская грамматика には、形動詞は特殊な接尾辞によって時制の意味（значение времени）を表すとした後に、以下のように記述されている（Русская грамматика/ §1577）。

> それに応じて、すべての形動詞は、形動詞現在（причастия настоящего времени）と形動詞過去（причастия прошедшего времени）に分けられる。形動詞現在は、不完了体動詞から形成される。この形動詞現在は、対象を形容する特徴（характеризующий признак ）として提示された動作が、現在において（в настоящем）行われるということを意味している。・・・形動詞過去は、完了体および不完了体動詞から形成される。この形動詞過去は、対象を形容する特徴として提示された動作が、過去において（в прошлом ）行われたということを意味している。・・・

そしてさらに、同じ箇所で、以下のような注意書が添えられている。

> 文においては、形動詞の時制は、相対的でありうる。それは、形動詞の形態自体のみを基礎とするのではなく、述語の時制の意味をも基礎として、設定されるのである。

このように、 Русская грамматика では、形動詞の時制を、最初に絶対時制であるとしておいて、次に相対時制であるとしているのである。ところが、同書の別のところでは、以下の通り、形動詞の時制は、相対時制であると言い切られているのである（Русская грамматика/ §2102）。

> 形動詞構文（причастные обороты）および副動詞構文（деепри-

частные обороты ）においては、時制の意味は、絶対的ではなく、相対的である。

このように、形動詞の時制は、相対時制なのか絶対時制なのか明確ではなく、さらには、これ以外の方法による説明を試みたものもある（Чуглов/ 56）。以上の状況を見ただけでも、形動詞の時制に関しては、最終的な意見の一致に達していないということが言えるであろう。

2．本稿の対象

このような状況にある形動詞のなかで、もっとも複雑な様相を呈しているのが、述語動詞の時制が過去であるときの、能動形動詞現在（例 читающий ）および不完了体動詞から形成される能動形動詞過去（例 читавший ）の用法である[1]。まず、Соболевский の古典的な記述およびその用例を、見てみることにする（Соболевский/318 ～319 ）。彼は、まずロシア語の形動詞の時制に関して、一般化して、以下のように言っている。

> ロシア語の形動詞は、時制の表示に関して、部分的には副動詞に類似しており、部分的には直説法に類似している。

このことは、要するに、ロシア語の形動詞は、時制に関して、相対時制でもあり、また絶対時制でもあるという意味である。さらに、能動形動詞現在および能動形動詞過去(несов) について、Соболевский は、それぞれ以下のように記述している[2]。

> ・・・形動詞現在は、大部分、支配する(управляющий) 動詞の動作と同時の動作を表すが、ときには、話者の発話時（момент речи говорящего) と同時の動作を表す。
>
> 不完了体の形動詞過去は、支配する動詞が過去時制の場合、（形動詞現在と並んで）その動詞の動作と同時の動作を指すことができる。しかし、それはまた、支配する動詞の動作がどの時制にかかっていようとも、話者の発話時に先行する動作を指すこともできるのである。

Соболевский は、以上のように問題の状況を記述しているのである[3]。また次に、彼によって挙げられた例文を、見てみることにする。

я (у)видел мальчика, несущего молоко.
я (у)видел мальчика, несшего молоко.　(下線は筆者による)

Соболевский は、述語動詞が過去時制で表されている場合、 несущего = несшего の関係が成り立つとしている。つまり彼は、両者とも (у)видел の表す動作と同時の動作を表すとしているのである。

このように、能動形動詞現在および能動形動詞過去(несов) は、相対時制か絶対時制かという、時制の性格が曖昧であり、また、そのため、述語動詞の時制が過去である場合、競合関係に置かれる。そこで本稿では、競合関係に置かれる場合を中心に、形態論および統辞論の視点から、能動形動詞現在および能動形動詞過去(несов) の用法を検討する。

3．形態論的前提

ここで、普通は当然のこととしてあまり顧みられることのない、能動形動詞の形態論的特徴を、その形式および意味の面について、触れておきたい。

最初に、能動形動詞現在および能動形動詞過去(несов) の形成を見てみることにする。能動形動詞現在は、動詞の現在語幹に、その動詞の直説法現在の変化の型により、 -ущий(-ющий) もしくは -ащий(-ящий) を付けることにより形成される (例 читающий, говорящий) 。一方、能動形動詞過去(несов) は、動詞の過去語幹に、それが母音で終わるか子音で終わるかにより、-вший もしくは -ший を付け加えることによ形成される (例 читавший, несший)[4] (Русская грамматика/ §1581, §1584) 。このこと、つまり、能動形動詞現在は動詞の現在語幹から、能動形動詞過去(несов) は動詞の過去語幹から形成されるという事実から、能動形動詞現在は直説法現在に、能動形動詞過去(несов) は直説法過去に結び付けて考えられるのである。

ところで、動詞の直説法現在の形態は、基準点(точка отсчета) に対する同時性(одновременность) の意味を、直説法過去の形態は、基準点に対する先行性(предшествование) の意味を持っている (Русская грамматика/ §1495) 。つまり、能動形動詞の時制に関しても、その意味を、1．で引用したように定義するよりも、基準点に関連させて定義した方が良いように思われる。そこで、能動形動詞現在については、対象を形容する特徴として提示された動作が、基

準点に対する同時性によって特徴付けられるとする方が、また能動形動詞過去(несов) についても、同じ動作が、基準点に対する先行性によって特徴付けられるとする方が良いであろう。

また、ヤーコブソンは、ロシア語動詞の形態論的カテゴリーの構造を、二項対立で説明しているのであるが、直説法の時制に関しても、それを適用している（ヤーコブソン/ 61）。彼によると、過去時制が有標項であるのに対し、現在時制は無標項であるという。このことは、経験的にも異論がないように思えるが、形態論的にも根拠付けることができる。つまり、有標項である過去時制は、それが「過去」であることを明示的に示す接尾辞-л- を有するのに対し、無標項である現在時制は、そのような接尾辞を持たないのである。以上のことは、そのまま、能動形動詞の時制にも応用することができる。つまり、直説法過去で、接尾辞-л- の現れたその場所に、能動形動詞過去(несов) では、-в- という文字（もしくは音素）が現れるのでり、一方、能動形動詞現在においては、そのような文字（もしくは音素）は現れないのである[5]。以上のことから、不完了体動詞から形成される二つの能動形動詞においては、時制に関して、能動形動詞過去(несов) は有標項、一方、能動形動詞現在は無標項ということになる。以上の事実は、 Виноградов や Forsyth によっても、認められていることである（Виноградов/231～232, Forsyth/310）。

以上の、時制の基準点に対する関係性および二項対立という二点をまとめると、以下のようになる。つまり、能動形動詞過去(несов) においては、対象を形容する特徴として提示された動作が、基準点に対する先行性によって特徴付けられるのに対し、能動形動詞現在においては、同じ動作が、そのような時制の意味に関して、特徴付けられてはおらず、能動形動詞現在に基準点に対する同時性という特徴が与えられるのは、非先行性から派生する二次的な意味としてなのであると。

4．統辞論的前提

形動詞からなる定語は、一般的には、それが補語もしくは状況語を持たない場合は、被定語の前に置かれ、反対に、それが補語もしくは状況語を持つ場合は、被定語の後に、孤立(обособление) させられて置かれるとされている（例えば Пешковский/425)。とはいうものの、定語が、補語もしくは状況語を持つにもかかわらず、孤立させられることなく、被定語の前に置かれることは、珍しいことでは全くない。

Стоял нестройный гомон, ржание лошадей, трели детских свистулек, марши и полки <u>гремящих</u> на каруселях оркестрионов.
（雑然としたざわめきや、馬のいななき、おもちゃの笛の音、メリーゴランドでがなりたてる手回しオルガンのマーチやポルカが、響いていた。）　(Бунин, 《Деревня》, I /103)

つまり、ロシア語では、定語の孤立は、補語もしくは状況語の有無によって、自動的に決定されるものではないのである。そのため、ロシア語では、定語は、被定語の前に孤立させられることなく置かれる場合と、被定語の後ろに孤立させられて置かれる場合とでは、その機能に関して、異なっているということが予想される。そこで、この二つの場合の定語の機能について考えてみることにする[6]。まず、被定語の前に置かれる場合であるが、この場合は特に問題はなく、定語は、被定語を修飾するという機能を持つのである。次に、被定語の後に置かれて孤立させられる場合であるが、この場合の定語の機能を考えるときに、参考になるのが、который を接続語(союзное слово) として用いた定語的従属文（определительное придаточное предложение ）である。この定語的従属文は、拡大的(распространительное) 定語的従属文と制限的 （ограничительное ）定語的従属文に分けられる（Русская грамматика/ §2767, §§2901～2908）。とはいうものの、ロシア語では、この区別は、修飾される名詞の意味論的特性や文脈などによるのであって、形式的に区別されるものではない。つまり、被定語が、意味論的な厳密化(уточнение) を要求せず、そのため定語的従属文の存在が必須ではないとき、その定語的従属文は拡大的であり、その反対のとき、定語的従属文は制限的なのである。これと同じ区別が、 Камынина によって、被定語の後に孤立させられて置かれる形動詞からなる定語にも、応用されている（Камынина/ 11）。彼女は、それぞれを簡単に、次のように説明している。つまり、「制限的」形動詞構文(причастный оборот) は、《Какой предмет?（どのような対象）》という問いに答えるものであり、一方、「拡大的」形動詞構文は、《Что предмет делает?（対象は何をする）》という問いに答えるものであるとし、それぞれに対し次の例文を挙げている。

Затем в том же журнале был помещен большой роман господина Сологуба, <u>представляющий</u> собой неудачную попытку набросать картину декаданса в нашем интеллигентном обществе.
（その後、同じ雑誌に、失敗ではあったが、われわれの知識層社会におけるデカダンスの状況の素描の試みである、ソログープ氏

の巨大長編小説が、掲載された。）

Тогда о.[=отец] дьякон кашлял и со строгим деловым видом выходил из палаты, а Лаврентий Петрович, притворявшийся спящим, видел сквозь прищуренные глаза, как они целовались.
（そのとき、神父の輔祭はせきばらいをし、厳格な実務的な顔つきをして病室から出て行き、寝たふりをしたラブレンチー・ペトーロビッチは、細めた目の隙間から、二人がキスしているところを見るのであった。）　（カギカッコおよび下線は筆者による）

もちろん、「制限的」孤立定語と「拡大的」孤立定語は、個々の具体的な文において、厳密に区別できるものではないし、またそのため、この区別は、広く認められていはいない。形式的な面で言えることは、定語が孤立させられているか否か、孤立定語であるか否かということのみである。とはいうものの、それでも、その孤立定語のなかに「制限的意味」を持ったものがあることについては、今見てきた通り、肯定できるように思われる。そこで、本稿では、孤立定語のなかに「制限的意味」を持ったものが存在するという考え方を、採用することにする[7]。

5．分析

それでは、述語動詞が過去時制で表現されている文における、能動形動詞現在および能動形動詞過去(несов) の、具体的なテキストにおける用例を、見てみることにする。そのさい、既に4．で触れた通り、能動形動詞現在もしくは能動形動詞過去(несов) からなる定語が、被定語の前に孤立されることなく置かれた（以下、非孤立定語として用いられた）場合と、被定語の後に孤立させられて置かれた（以下、孤立定語として用いられた）場合とに分けて考える。

5．1．非孤立定語として用いられた場合

この場合の能動形動詞の時制について、 Калакуцкая は、それが述語動詞の時制を基準点とした、相対時制であると主張している（Калакуцкая/ 11～13）。つまり、能動形動詞現在は、述語動詞の表す動作と同時の動作を表し、一方、能動形動詞過去(несов) は、述語動詞の表す動作に先行している動作を表すというわけである。この意見はもっともなものであり、疑う余地のないように思

われ、またそのような用例は、探そうと思えば、いくらでも見つかる。

Пестренький цыпленок, попискивая, бродил по подоконнику, стучал клювом в стекла, ловя мух, а она сидела на нарах, качала люльку и жалким, дрожащим голосом пела старинную колыбельную песню:...
（まだら模様のひよこが、ぴよぴよと鳴きながら、窓の敷居の上をよちよち歩き、はえを捕まえようとしては、ガラスを嘴で叩いていた。さて、彼女は板寝床に座り、ゆりかごを揺すりながら、あわれっぽい震える声で、昔から伝わる子守歌を歌った。）
（Бунин, 《Деревная》, I /100）

Видневшийся в оконце глаз старухи исчез, а Маслова вышла на середину коридора и быстрыми мелкими шагами пошла вслед за старшим надзирателем.
（小窓に見えていた老婆の目が消えて、マースロワは廊下の中ほどへ進み、看守長の後を、小刻みな急ぎ足で歩き出した。）
（Толстой, 《Воскресение》, часть первая, I /9）

前者の例では、 дрожащим が、 пела の表す動作と同時の動作を表し、また、後者の例では、видневшийся の表す動作は、исчез の表す動作に先行していると言える。一般的に言って、述語動詞の時制が過去であるとき、その影響を受けて、時制に関して無標項である能動形動詞現在が、述語動詞の動作と同時の動作を表し、一方、時制に関して先行性を明示する、つまり有標項である能動形動詞過去(несов) が、述語動詞の表す動作に先行する動作を表すということは、十分考えられることである。

ここで注意しておかなければならないことは、後者の例において、видневшийся の表す動作の最後が、исчез の表す動作と重なっているとしても、それは問題ではないということである。このことについては、体のカテゴリーの関与について言及した服部を参考にすることができる（服部/ 65～76）。つまり、動作の一体性（целосность）、簡単に言ってしまえば動作の完成・完結に関して無標項である能動形動詞過去(несов) は、それによって表される動作が、少しでも述語動詞の表す動作に先行していれば、用いられる可能性を有するのである。

さてところが、以上のように能動形動詞からなる定語が孤立させられていな

いとき、その時制は相対時制であるとする結論に反する例が確かに存在する。その例を挙げる。

Буксирный пароход, мерцая зеленым фонарем, бесшумно поварачивал к берегу, оставляя за собою тускло сверкавшую струю.
（曳航船は、緑色の明かりを明滅させ、かすかに輝く一筋の流れを残しながら、音も立てずに岸の方にカーブを切っていた。）
(Вересаев, «Прекрасная Елена»/197)

この例文では、 сверкавшую の表す動作が、поварачивал もしくは оставляя の表す動作に先行していると考えるのは、不自然であり、それぞれの動作は同時であると解釈する方が良いであろう。すると、この場合の能動形動詞過去（несов）の時制は、相対時制ではなく、話者の発話時を基準点とした絶対時制となる。このような場合、能動形動詞過去(несов) を能動形動詞現在に書換えても、それらが用いられている文全体の表す状況自体は、ほとんど変わらないように思える。そこで、能動形動詞過去(несов) が用いられた場合の文体論的特徴について考えてみたい。

服部は、能動形動詞（形動詞構文）からなる定語と定語的従属文および等位接続詞を含む重文の関係について触れたさいに、能動形動詞過去(несов) は、時制および体のカテゴリーを持っているため、「能動形動詞過去を含んで実現された文によって単文の連鎖ないし重文を含む文章が平行して意識されると考えることはあながち無理なことではない。」と記している（服部/ 72～73）。そして、いくつかの例文が挙げられているのであるが、その中で、ひとつだけ非孤立定語として用いられている能動形動詞過去(несов) を含む文がある。

Долго я глядела на сверкавшее в лучах солнца зимнее море,...
（長い間、私は冬の、陽に輝いた海を見つめていましたが・・・）

この場合、時制に関して、能動形動詞過去(несов) と対応する直説法過去との間には、何の差異もない。そのため、

море сверкало

という文が、意識されるということになっても、不思議ではない。つまり、非孤立定語として用いられた能動形動詞過去(несов) とそれが修飾する被定語の

結合においては、修飾・被修飾の関係と同時に、その陰に主語・述語の関係[8]が、暗示されていると考えることができる。

5．1．を終えるに当たり、最後に、能動形動詞過去(несов) の時制が、相対時制であるのか、それとも絶対時制なのか、区別のつきずらい場合もあるので、その例を挙げておく。

> Океан с гулом ходил за стеной черными горами, вьюга крепко свистала в отяжелевших снастях, пароход весь дрожал, одолевая и ее, и эти горы, — точно плугом разваливая на стороны их зыбкие, то и дело вскипавшие и высоко взвивавшиеся пенистыми хвостами громады, — ...
>
> (大洋は壁の外で、唸るような音をたてながら、黒い山のように動き、吹雪は、重くなった索具のなかで、衰えることなくヒューヒューと音をたて、汽船全体は、この吹雪をそしてこれらの黒い山をうちまかそうと震え、―― まるで鋤ですき分けるように、そのゆらゆら揺れ、たえず沸き立ち、高く舞いあがる泡立つ尾を、両側にかき分けた。・・・)
>
> (Бунин, «Господин из Сан-Франциско»/222)

この例文で、 вскипавшие および взвивавшиеся の時制は、相対時制とも絶対時性とも解釈することが可能である。ただし、相対時制であると考える場合、二つの能動形動詞過去(несов) は、述語動詞 дрожал ではなく、副動詞 разваливая を基準点とし、不完了体動詞から形成される вскипавшие, взвивавшиеся および разваливая の体の用法を、継続ではなく反復と解釈しなければならない。

なお、述語動詞が過去時制であるにもかかわらず、能動形動詞現在が話者の発話時と同時の動作を表す場合も、論理的に考えると、存在するはずであるが、その場合、用いられるのは能動形動詞現在のみで、能動形動詞現在と能動形動詞過去(несов) の競合の問題は起きることはないので、本稿では扱わない。

5．2．孤立定語として用いられた場合

Пешковский は、二次的孤立成分の特徴を、次のように定義している (Пешковский /416) 。

二次的孤立成分と呼ばれるものは、旋律・リズムにおいて、またそれと平行して、自らと周囲の成分との関係において、個別の従属文に相当する（単独もしくは従属する成分をともなった）二次的成分である。

もう少く詳しくいうと、二次的孤立成分は、「旋律・リズム」、言い換えるとイントネーションに関して、また、「自らと周囲との関係」、つまり意味的な関係に関して、従属文に相当し、そのため文字通り「孤立」しているのである。この孤立性が、孤立定語として用いられている、能動形動詞現在と能動形動詞過去(несов) の選択においても、現れるということは、十分に考えられることである。どういうことかというと、能動形動詞が非孤立定語として用いられた場合とは異なり、それが孤立定語として用いられたとき、その時制は、述語動詞の時制の影響力から逃れ、話者の発話時を基準点とした絶対時制になると仮定することができるということである。この仮定については、既に Камынина によって以下のように語られている（Камынина/ 11）。

要するに、形動詞構文の叙述的拡大的意味（повестововательно-распространительное значение）においては、時制の測定のための基準点は、きまって話者本人である。

それでは、例文を見ることにする。最初に、能動形動詞現在が、時制に関して、絶対時制で用いらている例を見てみる。

Люди считали, что священно и важно не это весеннее утро, не эта красота мира божия, данная для блага всех существ, — красота, <u>располагающая</u> к миру, согласию и любви, а священно и важно то, что они сами выдумали, чтобы властвовать друг над другом.
（人びとは、神聖で重要なものは、この春の朝でもなければ、すべての生きとし生けるものの幸せのために与えられた、神の世界のこの美しさ —— 平和と親睦と愛に人びとの心を向けさせるその美しさでもなく、神聖で重要なもは、互いに相手を支配するために自分たちで考え出したものであると、考えていた。）
(Толстой, 《Воскресение》, часть первая, I /8)

同様に、能動形動詞過去(несов) が、絶対時制で用いられた例を挙げる。

Осенью возле постоялого двора, стоявшего одним боком к шоссе, другим к станции и элеватору, стоном стонал скрип колес:...
(秋、一方が街道に、もう一方が駅と穀物倉庫に面したはたごやの近くでは、車輪の軋みが、うめき声のように響いた。)
(Бунин, «Деревня», I / 99)

この例では、述語動詞の表す動作と、能動形動詞過去(несов) が表す動作は、同時のように思われるであろうが、それはヴェランの言う通り (ヴェラン/ 93) 文脈によるのである。このことは、言い換えると、能動形動詞過去(несов) からなる孤立定語の表す動作と、直説法過去の述語動詞の表す動作は、ロシア語の使用者の側によって、主体的に同時のものとして、結び付けられるということができるかもしれない。

以上が、孤立定語として能動形動詞現在および能動形動詞過去(несов) が、その時制に関して、絶対時制で用いられた例である。さて、述語動詞の表す動作に先行する動作を能動形動詞が表すという場合も考えられるのであるが、その場合に用いられるのは、もちろん、能動形動詞過去(несов) であり、これ以外は、考えられないであろう。

Мисс, все время странно смотревшая на него, села на стул и, зажав рот платком, зарыдала.
(彼をずっと奇妙な様子で眺めていたミスは、椅子に座り、口をハンカチで押えて、すすり泣きはじめた。)
(Бунин, «Господин из Сан-Франциско»/234)

このような例では、能動形動詞過去(несов) は、時制に関して、相対時制で用いられているとも言えるかもしれない。しかし、この場合、能動形動詞過去(несов) の時制は絶対時制であり、動作に前後関係が感じられるのは、文脈もしくは文全体の表す状況により、話者が主体的に二つの動作の前後関係を設定するとすることも可能であるように思われる。つまり、まとめると、孤立定語として用いられた能動形動詞現在および能動形動詞過去(несов) は、時制に関しては、あくまでも、話者の発話時を基準点とした絶対時制であると解釈することが可能である。

しかし、孤立定語でありながら、相対時制で用いられている能動形動詞現在

が、しばしば見られる。その場合の文体論的特徴について考えてみる。

— Разнуздай-ка лошадь-то, — сказал Тихон Ильич, въезжая в пруд, пахнущий стадом.
（「馬ろくを外さないか。」と、チーホン・イリイッチは、牛の群れの匂いのする池に入りながら言った。）
(Бунин, «Деревня», I /109)

ヴェランによると、 пахнущий に対しては、「限定」（つまり修飾）の特徴が主張され、一方、それと競合関係に置かれる пахший （もしくは пахнувший）では、「事項の進展」が焦点となり、前者は「名詞的価値」（つまり形容詞的価値）に、後者は「動詞的価値」により近いものとなっていると説明されている（ヴェラン/ 93〜94）。確かにその通りであるように思われるが、 пахнущий に4．で触れた制限的意味という概念を適用すると、より分かりやすくなる。つまり、正確にいうと пахнущий は пруд という語の意味を、厳密化しているのであり、ただ単に拡大しているだけではない。簡単にいうと、例文の

пруд, пахнущий стадом

の部分は、

пахнущий стадом пруд

と比較して、修飾という統辞論的機能に関しては、同一のものであったのが、何らかの要素の作用により[9]、形動詞構文 пахнущий стадом の部分が孤立したものと思われる[10]。

最後にここでも、5．1．と同様に、能動形動詞現在が、絶対時制で用いられているのか、相対時制で用いられているのか、どちらとも解釈可能と思われる例があるので、一応挙げておく。

У этих больших белых ворот сидела и вязала чулок старуха, похожая на старуху из сказки, — в очках, с клювом, с провалившимися губами — одна из вдов, живущих в приюте при кладбище.
（この大きい白い門のところでは、眼鏡を掛け、鷲鼻で、唇の落

ち窪んだ、おとぎ話にできそうな老婆が、腰を下ろして、靴下を編んでいた。墓地に付いている養老院で暮らす後家のひとりであろう。）　（Бунин, 《Деревня》, Ⅰ/105）

6．結語

例えば、《Деревня》のⅠを見てみる（Бунин, 《Деревня》/ 97～149 ）。そこには、述語動詞の時制が過去であるという条件を満たす能動形動詞現在が、56例あるのであるが、そのうち非孤立定語として用いられているものは 40 例（71.4%）、孤立定語として用いられているものは 16 例（28.6%）である。また、同じ条件を満たす能動形動詞過去(несов) は 53 例あり、そのうち孤立定語として用いられているものが 45 例（84.9%）、非孤立定語として用いられているものが8例（15.1%）である。この数値は、不完了体動詞から形成される能動形動詞は、非孤立定語としての位置では能動形動詞現在が、孤立定語としての位置では能動形動詞過去(несов) が用いられやすいという傾向を持っているということを物語っている。本稿は、もともとこの現象を説明しようとしたものである。そこでまず第一に、これらの能動形動詞が非孤立定語として用いられたとき、その時制は相対時制であり、反対にそれが孤立定語として用いられたときには、その時制は絶対時制であると仮定した。しかし、この原則に適合しない例を見つけるのは難しいことではなく、第二にそれらの例の意味論的および文体論的特徴の説明も、それぞれ試みたつもりである。

— 注 —

[1] この二つの能動形動詞は、両者とも、不完了体動詞から形成されるのであるが、能動形動詞現在が、不完了体動詞のみから形成されるのに対し、能動形動詞過去は、完了体・不完了体の両方の動詞から形成される。そこで、能動形動詞過去については、不完了体動詞から形成される能動形動詞過去を、「能動形動詞過去(несов) 」と表記することにする。

[2] ただし、Соболевский は、能動形動詞と被動形動詞を区別せず、単に形動詞現在および不完了体（Соболевский の言う длительный вид ）から形成される形動詞過去を問題としている。

[3] もっとも、Соболевский によっては、能動形動詞過去(несов) が、述語動

詞の表す動作に先行する動作を表す場合については、述べられていない。

[4] ただし、能動形動詞過去には、例外があり、 -сти で終わる動詞は、現在語幹に -ший が付け加えられて形成される（вести: вед-ший < вед-ут)。とはいうものの、このような形成は、生産性もなく、少数の例外として処理してよいものと思われる。

[5] 過去語幹が子音で終わる動詞の能動形動詞過去では、-в- は現れないが、それは、ロシア語の音声学的要因によるものと思われる。また、この型の動詞は、注[4] の動詞と同様に、生産性もなく、少数の例外として扱って良いものと思われる。また能動形動詞現在においては、 -у-(-ю-) もしくは -а-(-я-) という文字（もしくは音素）が現れると言えるかもしれないが、これらは直説法現在三人称複数の人称語尾の一部と同一のものであり、能動形動詞過去(несов)における-в- と同列に扱うわけにはいかない。

[6] 本稿では、主語である名詞の前に置かれて、それを修飾すると同時に原因や譲歩を表すという機能を持っている形動詞（Русская грамматика/ §2108）は扱わない。

[7] 本稿では、孤立という語を用いてはいるが、そのこと自体に問題がないわけではない。 Русская грамматика では、孤立を、イントネーションおよび意味関係の二つの観点から定義しているのであるが、意味関係の観点からすると、5．2．で引用した例文のうち、特に斜格の名詞を修飾する孤立定語は、厳密な意味では、孤立定語とは言えないものである（Русская грамматика/ §2100, §2110）。孤立もしくは孤立定語については、今後の課題とし、本稿ではこれ以上立ち入らないことにする。

[8] ちなみに Шахматов は、定語として用いられる形容詞を修飾語的定語（аттрибутивное определение ）とし、それに対し、定語として用いられた形動詞を述語的・修飾語的定語（предикативно-аттрибутивное определение）と呼んでいる（Шахамтов/ §392 ）。

[9] この要素として、文体論的なものが予想されるが、本稿では扱わない。

[10] 1例だけ、論理的に説明のつかない例が見つかっている。人称代名詞から

なる被定語に定語がつくとき、その定語は必ず孤立すると言われている（例えば、Пешковский/429）。そうなると、人称代名詞を修飾する能動形動詞は、常に孤立し、その時制は、必ず絶対時制になり、したがって、述語動詞が過去であれば、能動形動詞は、能動形動詞過去(несов) にならなければならないはずである。ところが相対時制で用いられている例、つまり能動形動詞現在が用いられている例がある。これの解釈は、形動詞からなる非孤立定語が人称代名詞を修飾できないという規則があるためであると、簡単に片付けることが可能かもしれないが、注[7]で触れた孤立の意味論的な問題とも係わってくると考えることもできるので、ここでは、その用例を挙げるのみにし、その解決は、今後の課題としたい。

Он заглянул в щелочку двери, из которой она было высунула голову, и, увидев ее, сидящую за чайным столиком, вошел к ней с веселым и ласковым видом.
（彼は、彼女がそこから頭を突き出そうとしてやめたドアの隙間を覗き込み、茶卓についている彼女を見て、快活で愛想のよさそうな面持ちでそこに入っていった。）
(Гоголь, «Мертвые души», том первый, глава третья/ 56)

— 文献 —

Русская грамматика, тт. 1,2, М, 1980.

Виноградов В.В. Русский язык, изд. 3-е, М.,1986.

Калакуцкая Л.П. Адъективация причастий в современном русском литературном языке, М.,1971.

Камынина А.А. К вопросу о полупредикативности причастий в строе простого предложения // Славянская филология, М., 1979.

Пешковский А.М. Русский синтаксис в научном освещении, изд. 7-е, М. 1956.

Соболевский С.Н. Грамматика латинского языка, изд. 2-е, М, 1939.

Чуглов В.И. Категории залога и времени русских причастий // Вопросы языкознания, М., 1990, No.3.

Шахматов А.А. Синтаксис русского языка, Л., 1925.

Forsyth, J., A Grammar of Aspect, Cambridge, 1970.

C.ヴェラン, 「ロシア文法」, 矢野通生訳, 白水社, 1970.

R. ヤーコブソン，「ロシア語動詞の構造について」，米重文樹訳 // ローマン・ヤーコブソン選集Ⅰ」，大修館書店，1986.
服部文昭，「過去時制の文における能動形動詞と不完了体派生の能動形動詞過去との競合について」 // ロシア語研究 No. 3, 1990.

— 出典 -

Бунин, «Деревня», «Господин из Сан-Франциско», Собрание сочинений в четырех томах, т. 2, М., 1988.
Вересаев, «Прекрасная Елена», Собрание сочинений в пяти томах, т. 1, М, 1961.
Гоголь, «Мертвые души», Собрание сочинений в семи томах, т. 5, М. 1967.
Толстой, «Воскресение», Собрание сочинений в двадцати двух томах, т. 13, М., 1983.